

ショーンは、理論と実践という二項対立を克服した専門家モデルの提唱により、実践者が創出する実践の中に埋め込まれた知の有用性を明らかにし、正当化した。それは、アカデミック偏重主義からの転換を論じたのであり、アカデミックな知識を否定したわけではないと考える。

以下、専門家教育におけるアカデミックな知識の意義や役割についての見解を述べる。

### 1. 知識社会において求められる知識とは

知識とは、人が情報（データをある目的のために意図を持って整理・加工したもの）を既存の認識と結びつけて体系化した情報であり、物事の本質についての理解・解釈である。知識は、個々の人間が自分の認識と結び付けて紡ぐものである。このような構成主義的な知識観以前は、教師の頭の中にある決まった知識を転移するといった考え方であった。

様々な問題解決を行い、社会の変革に適応していかなければならない我々にとって必要なのは、単なる専門知識ではなく、ドラッカーの言う「行動のための知識、しかも客観的で伝達可能な体系化された」、「他の知識と連携して役に立つ」専門知識である。

### 2. ショーンの提起した専門家像が求めること

我々が学校教育や企業教育で慣れ親しんできた「基礎」から「応用」、「理論」から「実践」という順序は、上記の知識観に照らして常に疑問を持って見直されなければならないと考える。具体的には、人材育成の方法が、学習者の持っている知識や経験と結び付けて、応用場面を思い描かせ、基本となる原理・法則や概念などの基礎を培っていかせるものになっているかというチェックが必要である。

### 3. 「行為の中の知」（=暗黙知）と形式知の関係性

知識は、暗黙知と形式知の間の絶え間ない変換によって創造される。その相互変換は以下の4つのプロセス（SECIモデル）で捉えることができる。

- ① 共同化 Socialization (暗黙知から暗黙知を獲得) : 経験をともにすることによる暗黙知の共有
- ② 表出化 Externalization (暗黙知から形式知を獲得) : 対話や共同思考によるコンセプト創造
- ③ 連結化 Combination (形式知から形式知を獲得) : 形式知の組み合わせによる新たな形式知の創造
- ④ 内面化 Internalization (形式知から暗黙知を獲得) : 文書やマニュアルによる追体験

知識は、この4つの変換プロセスの上で、螺旋を描きながら変換され、創造されている。(野中郁次郎、竹内弘高、1996)

このような知識創造におけるスパイラルを考えると、アカデミックな知識(形式知)は否定されるべきものではないと考える。個人が知識を構成していくプロセスで、省察する標準的な枠組みとなるものとして、文章等で客観的に示された標準的な理論や原理原則も重要であり、それらと実践との間を行ったり来たりすることで、様々なアイデアを創出し、自分の知識を構築していくことができるからである。

#### 4. 専門家教育におけるアカデミックな知識の意義や役割

反省的实践を行う専門家は、暗黙のうちに依拠する自分自身の枠組みそのものを問い直しながら新たな認識・判断・行為を見出していく。その際には、現実が発生している状況を見て働きかけるだけでなく、アカデミックな理論を参照することも必要と考える。「だが一方、専門分化は負の効果ももちうる。一人の個人の中では、高度に特殊化することが視野の偏狭をもたらす可能性がある。」(課題図書 P. 103-104) とあるように、多くの反復的实践を行う専門家が省察を行ううえで、木を見たり、森を見たりと視点を変えるために、アカデミックな知識との行き来は重要である。

また、単なる技術的熟達者とは異なる専門家は、問題解決ができるだけでなく、できたことをシステムの的に捉えて、なぜうまくいったのか説明を試み、個人としての成果を広く所属組織や社会に広める責務を負っていると思う。自らの専門領域の人材の層を厚くし裾野を広げるなど、領域の発展に向けた努力をすべきである。

そのためにも、アカデミックな知識から様々な使える知見を抽出して、人材育成等の活動に活用できるようにしていくことは、重要な意義や役割を持つものと考えられる。